

食に関する地域社会活動が生きがい感に及ぼす影響

— 地域高齢者の調査結果を通して —

村岡 則子

地域総研紀要 12 巻 1 号, P31-38(2014) (一般論文)

この研究では、個々の趣向など個人因子に反映されることの少ない人間の共通ニーズである食に関わる地域社会活動が生きがい感に及ぼす影響について分析を行っている。これまでの研究から、社会活動としての趣味活動と生活の質 (Quality of life) との間で相関があることが確認された。個人の好みにあった社会活動を行うことと、一人ひとりの精神的活力に関連があると述べている。しかしながら、未だボランティアなどの社会参加と Quality of life 向上過程に伴う生活環境の特有性や関係性など一見した見解を得られているとは言い難く、さらなる実証的研究を進めることが必要である。そこで村岡(2014)の研究では近藤・蒲田(1998)が開発した生きがい感スケールを用い分析を行った。分析に用いたデータは地域在住の高齢者 61 名が対象としたアンケート方式の調査データである。分析の結果、ボランティア活動年数が長い人ほど、生きがい感を構築する「存在価値」を見出している人が多いことが判明した。ボランティア活動を継続して実施していく過程で、通常の過程生活に留まらない多くの豊富な社会経験を得て事故の存在価値を高めていったと考える。これまでの研究においても中高年層がボランティアに関して自主活動の参加が高頻度であると参加しない人に比べて抑うつ傾向、健康度自己評価及び生活自立度の低下が抑制されやすいや中年期以降の人々が社会活動などの家庭外の役割を持つことは精神的健康につながると報告されている。